

「茶旅」

”こぼればなし“

(22)

中国湖北省 150年前にロシア人が建てた茶工場を発見!

コラムニスト 須賀 努



中国の茶産地は既にかなり訪ね歩いたつもりだったが、湖北省はある意味で、ノーマークだった。昨年来、お茶のシルクロード、『万里茶路』の道を訪ね歩く中、湖北省を2度訪れ、その歴史の深さと面白さを体験したので、報告してみたい。

湖北省と言ってもピンと来ないかもしれないが、『赤壁』のあるところ、と言えば、多くの日本人が知っている。三国志でも最も有名な赤壁の戦い、普段は全く反応しない我が息子たちでさえ、『今赤壁にいるよ』とLINEを送ると、『おー、レッドクリフか』と言ってくる。ゲームのやり過ぎである。その赤壁駅に降り立ったが、目的地は古戦場ではなく、羊楼洞という田舎町

だった。駅前でタクシーを拾い、『羊楼洞に昔ロシア人が建てた茶工場があるはずだが』と言ってみたが、地元の人運転手が『そんなの聞いたことがない』というので、仕方なく、彼の知っている古い茶工場に連れて行ってもらった。

そこは街外れで、畑の中に静かに建っていた。何んとも古びた感じの場所、一緒にいったカメラマンは『素晴らしい』を連発して写真を撮りまくる。一体ここはどこなんだと看板を見ると『松峰老知青茶庄』とあったから、驚いた。知青とは、知識青年のこと、あの文化大革命中に下放された学生たちがここでお茶作りの労働をした場所だったのである。建物の中

には、その頃を懐かしむ写真などが展示されていたが、当時の過酷な状況が偲ばれる。お茶作りにも政治や歴史が大いに関係している。

そんなことを考えながら、後ろを振り返ると、かなり古びた建物が見えた。建物の中には製茶道具が残されており、ここが茶工場だったことは確認できた。何となく建物が中国的ではないなと思ひ、近所のお爺さんに聞いてみると『祖父からロシア人が建てたと聞いている』との証言を得た。ここが1863年にロシア人の茶商が開いたと言われている茶工場だと確信した。しかしわざわざ遠くロシアから来て、なぜこんな田舎に茶工場を作ったのだろうか。

当時茶葉は世界的な戦略物資であり、折しも第二次アヘン戦争により、敗れた清国は列強各国に国内に入つて貿易することなどを認めざるを得ない状況となった。万里茶路を通じて国境のキャプタで中国から茶葉を大量

に輸入していたロシアも、中国内に進出、それまで山西商人などに独占されていた茶貿易の獲得に乗り出した。そして茶葉を押しさえるために、はるばる茶産地にまで乗り込み、そこで加工を行うこととなった。目の前に見える茶工場の歴史の壮大さは、語り尽せないものがある。因みに羊楼洞の街には茶葉貿易のための茶商はもと

より、金融業に従事する者まで、様々な人々が入りし、活況を呈していたという。今やその古い町並みだけが、ひっそりと残っており、往時を偲ばせる。

列強の進出によって開港された港は上海や廈門だけではなく。内陸部でただ1つ、漢口(武漢の1つの街)も選ばれていた。揚子江流域にあり、交通の要衝であり、昔から貿易で栄えていたが、当時ここが選ばれた大きな理由は茶葉貿易だったと推測できる。先ほどの羊楼洞は漢口から130km、もつと近い咸寧などでも、当時大量の茶樹が植えられ、茶の生産が盛んに行われていた、と地元茶商も語っている。

当初羊楼洞に茶工場を建てたロシア人も、その後は直接漢口に工場を移していく。漢口にあるロシア租界には、往時ロシア系大茶商が工場を建てており、目の前には港があるという絶好のロケーションで貿易を行って

た。港は東方茶港と呼ばれ、ここから万里茶路を通じて北へ、そして揚子江を通じて、上海経由で海のルートでも運ばれていた。

今回現地の専門家の案内でロシア租界を歩いた。旧ロシア領事館などの建物が微かに残る中、おしゃれな外観の建物を指して、『あれが順豊茶廠のオーナー、リビノフが1902年に建てた屋敷だ』と説明される。順豊茶廠といえば、羊楼洞に茶工場を建て、その後この租界で大発展した会社である。更にはほぼ取り壊されていたが、順豊茶廠の工場跡もあり、また隣にはライバルの新泰茶廠のあったビルが、その内観を一部留めたまま、おしゃれな入ボットに生まれ変わっていた。1891年当時のロシア皇太子(のちのニコライ2世)もここ漢口に寄港し、新泰茶廠の設立25周年パーティに列席している。これだけを見ても、如何に当時のロシアにとって茶業が重要であったかがよくわかる。(すが つとむ)



漢口 ロシア租界 ロシア茶商の屋敷跡